

「出題の意図」

選抜区分	2025年度（選抜区分：学校推薦型選抜） 外国語学部 国際関係学科（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	1. 出題の背景・求める能力 【出題の背景】 学校推薦型選抜の小論文は、資料 1 として Tetsuro Kobayashi and Maiko Ichihara, “Japan’s accidental resilience in the disinformation age” (<i>The Japan Times</i>, May 9, 2024)を、資料 2 としてヤコブ・ムシャングア『ソクラテスからSNS 「言論の自由」 全史』（早川書房、2024 年）を、それぞれ抜粋・変更して出題した。いずれも、ソーシャル・メディアの普及に伴いフェイク・ニュースやヘイト・スピーチの影響が強まる中、われわれがどう考え、いかに対応すべきかを考察した内容である。前者は特に日本の状況の特殊性に関して、後者は「言論の自由」との関係について、示唆的な議論を展開している。近年、様々な内容で報じられることの多いテーマに即して、受験生の理解を問うために問題を作成した。 【求める能力】 問 1 は、資料 1 の冒頭の問いかけに対し、筆者がどのような回答を示しているかを、その理由とともに書かせるものである。資料 1 の英文全体を正確に読み取れているかどうかを確認している。比較的平易な文章で書かれているが、解答にあたっては、単なる要約ではなく、筆者の展開する論理を正しく追い、論旨をまとめる必要がある。したがって問 1 では、受験生の英語読解力のみならず、論理的な思考力を見ている。また、論拠となっている事柄が多岐にわたるため、字数の関係で表現に一定の工夫を凝らす必要がある。受験生の判断力と文章表現力を試すものでもある。 問 2 は、資料 1 と資料 2 の内容を正確に読み取り、「言論の自由」に関連付けて議論をまとめ、自分自身の見解を述べさせる問題である。資料 2 は議論の流れを追いやすい文章であるが、問題の所在を的確に判断し、それを二つの資料から根拠づけ、論述しなければならない。自身の見解を示す際も、単なる思い込みや独善的な内容になってはならない。したがって問 2 では、英語及び日本語の読解力に加えて、論理的な文章表現力を問うている。 2. 解説(解法) 問 1 では、冒頭で問いかけられた偽情報と日本社会との関係について、

筆者がいかなる見解を示しているかを、論旨に沿って説明しなければならない。筆者は日本の特殊性を指摘しているが、その理由は複数挙げられている。このうち、文意のとりやすいコロナ・ワクチンの接種率と日本語の存在に字数を割き、それ以外の理由にほとんど言及していない答案が目立った。文章全体を正確に把握することが求められる。偽情報に対し耐性が高いとされる日本社会であるが、筆者はそれを手放しで礼賛しているわけではない。このことに気づけなかった解答が多かった。筆者が日本の特徴として最も重視しているのは、政治への関心の低さである。偽情報等の悪影響を防ぎつつ、筆者の言う「偶然の回復力」に依拠しない社会をいかに構築していくか、筆者の論じ方を読み解き、バランスの取れた記述を心がければよい。また、解答の中には単語の意味を取り違えたり、論旨を誤って解釈したりする例が見受けられた。特に冒頭の問いかけにある age を年齢と誤解し、そのまま解答しているものが複数見られた。他にも基本的な単語の和訳を誤っているものも少なくなかった。注意が必要である。

問 2 は、「言論の自由」の位置づけをめぐる議論を二つの資料からまとめたうえで、自身の見解を述べさせるものである。「言論の自由」に制限を課すべきだという主張は、エコー・チェンバーやフィルター・バブルの影響で意見が過激になり、実害を与える可能性があることに根拠づけられる。それに対し、資料 2 には制限の有効性を否定する論拠がいくつも述べられている。いずれの立場にせよ、資料を読み込んで論を展開する必要がある。答案には、理由を箇条書きで並べるだけで文章として構成されていないもの、資料に基づかない主張を述べるものが目立った。問題文をよく読み、指示通りに解答することが望まれる。どちらの主張に与したかは得点に影響しないが、根拠を説得力ある文章で表現しなければならない。

なお、いずれの問いでも規程の字数に満たないものが散見された。減点対象となるので、問題文はもとより、注意事項もよく読んで解答する必要がある。また、全体を通じて単純な表記ミス(保障と保証の取り違えなどの誤字、文法上の誤り)もあった。こうしたミスが致命傷になることもあるので、注意してほしい。